

提出締切：2010年5月20日（木）

2009年度 研究の国際化推進プログラム「研究成果の国際的発信強化」 研究成果報告書

研究代表者	所属機関・職名： 情報理工学部 教授 氏名： 大久保 英嗣
研究課題	大連理工大学との研究連携強化プロジェクト

I. 「成果発信」の目的・意義の概要

今回の国際的研究成果発信の目的・意義について、概要を記入ください。

2007年11月に大連理工大学の代表団が本学BKCに来訪したことから両校情報系学部の関係が始まった。2008年3月24日に理工学部、情報理工学部の代表団が中国・大連を訪問し、大連市と理工系の研究・教育に関する協力についての覚書を締結するとともに、大連理工大学のソフトウェア学院、電子情報学院、機械学院との間で、それぞれ連携を強化することで合意した。その合意は2008年に大連理工大学電子情報学院で開催されたAsian Joint Workshop on Information Technologyに結実した。この成功を受けて今後も継続的に両大学で交互に開催して行くことが確認され、2009年9月に、BKC情報理工学部において第2回目のワークショップが開催されることとなった。本学と大連市および大連理工大学との協力関係をさらに強化する上で、本ワークショップの持つ意味が大きいと考えている。例えば、将来的に大連理工大学の大学院に立命館コースを設けて、一定数の留学生を継続的に受け入れるなどの活発な交流を実現するためには、このワークショップを継続・発展させて、教員、学生、職員の相互理解を深め、緊密な関係を築くことが必要不可欠である。それが情報理工学部のグローバル30のモデルとなるとの認識である。ワークショップを隔年で双方のキャンパスで開催するようにしたことも、この認識による。このため、2009年度のワークショップの成功は大前提であり、何よりも重要なことであった。

II. 「成果発信」の成果と今後の展開計画の概要

今回の国際的研究成果発信で得られた成果、目標達成度、今後の展開計画について、概要を記入ください。

ワークショップは9月8日～10日の3日間で開催された、参加者は、大連側が16名（教員7名、学生・院生9名）、立命側が22名（教員6名、学生・院生：16名）であった。発表件数は、大連側が教員による研究紹介4件、学生によるポスター9件（論文数17件）、立命側が教員による研究紹介4件、学生によるポスター16件（論文数16件）であった。このほか、情報理工学部執行部、学科長の先生方、学生の指導教員、興味を持った教員や学生など、本学より多数の参加を得た。

両校の教職員・学生の間で交流が進んだことは最大の成果であったが、さらに特筆すべきこととして、機械翻訳の分野の研究を行っている教員の間で、その後に共同研究の話が進んでおり、大きな成果のひとつと言える。さらに、情報理工学部の教職員が中心となって準備を進めたが、ポスターおよび案内板の作成については、2009年度から情報理工学部設立された学部公認の留学生支援ボランティア団体FSSのメンバーがデザインに協力し、また予稿集の作成には同学部の学生が参加した。これも、学部学生にとって参加機会の少ない国際会議に参画する機会を与えたという意味で、大きな収穫と言える。

ワークショップ終了後、2010年度は大連側にて開催することが大連理工大学より発表された。

本ページはホームページに公開いたします。1ページに収めてください